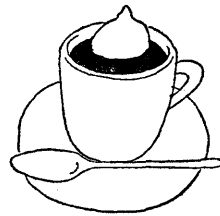


神賀忠吾氏の世界 (II)

江波 諄子



四、はじめての作品

ある年の暮の夜、神賀さんから電話があった。声は弾んで、まるで子どものように生き生きしていた。もうすぐ新しい作品が出来上るといふのだ。どんな作品かの説明はなかったが、いつもの神賀さんの製作過程から想像するに、相当のエネルギーを費した結果のことである。神賀さんの高揚する気持が私にも伝わってきた。

その日の電話の主旨は、新しい作品が出来たら一番最

初に出来たものを、まこちゃんに届けますということであった。まこちゃんとは、その頃二歳で病気をしていた私の娘のことである。私は、この時、神賀さんから「人に親切にする、人を思いやる」ということ以上の大事なことを教えられた。

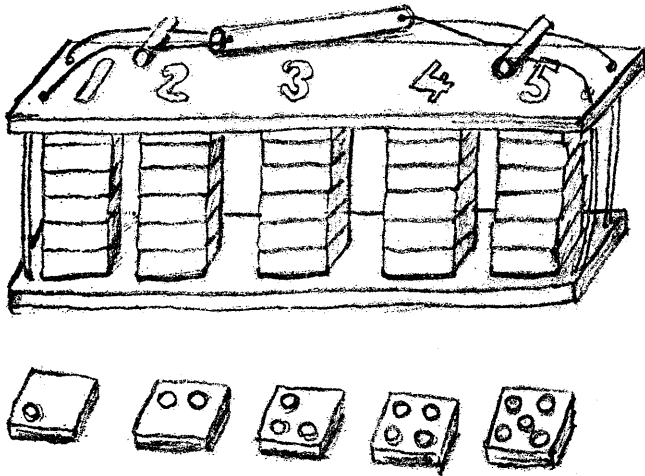
それは、神賀さんが何度も繰り返したように、「一番最初に出来たものでなければならぬ」ということについてである。手づくりの一番最初の作品といえば、誰にとっても忘れがたい一品である。そこには、これまでの

努力、迷い、思考、期待、不安、希望という道程を通り抜けて、はじめて形となってこの世に生まれ出たものであるからだ。確かに、はじめての作品には、多くのエネルギーがふぎこまれている。はじめてによせる気持は、到底二回目からとは、その緊張感も異なるだろう。このような人間の抽象的な思い入れが事実、客観的にどれだけ異なるかについて、あまり問題としない感覚の持ち主もある。日常の複雑な生活の中では、そのような繊細な感覚を忘れてしまうことも度々である。

しかし、目には見えないが、確かに思い入れが異なるはずだ。作った人のエネルギーの結晶ともいえるべき思い入れが、小さな人たちに伝わらないはずはない。いや、たとえ子どもがそのことを意識できなくとも、伝えることはできる。私たちは、子どもとの生活の中で、こうした真摯な思い入れこそ、大切にしていきたいものではないだろうか。

その作品は、なかなか数学的にも物理的にも深く考案された遊具で、次のようなものだった。

図 1



五、つみき

昨年、積木をテーマに卒論を書いているEさんと共に、神賀さんを訪れた。つみきについての神賀さんの考え方を、Eさんの卒論の中から紹介しよう。

〈木を楽しむ〉——神賀氏は、幼児の積木遊びは単に積木を並べたり積んだりするだけでなく、それ以前に幼児が木に触れて木のおいをかいたり、感触を楽しんだりするという経験がまず大事であるという。自然の中で生まれた木であるがゆえに、その他の人工物では得られないような幅広く奥深い体験を、幼児はすることができるといっているのである。つまり、木を積むという以前に、感覚的な体験をしながら遊ぶことができるのである。たとえば、木目にそって並べてみたり、木肌の色を区別して遊んだりするということが起こりうるわけである。木は自然が織りなしたものであるから単に見ているだけでもあきず、その変化を楽しむことができる。幼児に感じさせる場を与え、新しい感覚を

呼び起こすことになる。つまり、幼児期に好奇心や探求心を起こさせるきっかけを作ることになるという。これはプラスチックなどの積木では得られないことである。

〈木の種類〉——しかし、積木も木であれば何でもいというのではなく、木の材質そのものが大変重要となってくると神賀氏は述べている。木には多くの種類があつて、その材質の違いによって積木の与える効果が異なる。

では、どんな材質が積木として適しているのだろうか。神賀氏は、桜材こそが日本人に一番適し、又日本人が求めている材質であるという。それは、日本の住居をみてみると、昔から家の縁側、炉縁、敷居、床柱などに必ず桜材が使われていることからいえる。日常生活の中で常に触れているこれらに桜材を選んで使ったということは、日本人の好む感触が桜材とみているのではないかということである。

神賀氏は、日本人の好む材質ということで、桜材、

ほお材、もみじ材、けやき材の四種で子どもの玩具として自動車を作り、どれが自分の好きな車かという実験を多くの人に行っている。四台の車を被験者の前に置いて、重さ、感触、におい、木肌の色と自分がただ生理的に好む車を選んでもらうというものである。この結果、ほとんどの人が桜材でできた車を好んだという経験をしている。筆者も被験者となって上記の実験をやってみたが特にはっきりした理由を言葉で述べることはできなかったが、選んだ車が桜材のものであった。筆者自身不思議な気持ちであったが、無意識の下に生活の中で体得している感触なのかもしれない。

また、ほおのきも昔から日本人の生活の中にとけこんでいたので、恩物が初めて日本に入ってきた時は、ほおのきを使って作っていたらしいとも述べている。

しかし、以上の事は、だからといって桜材の他はすべてが不適當だというわけではない。どんなものに使ったら一番その材質が生きるかということが大切であるとも述べている。けやきやニレは、色がきれいで刺

激のあるにおいをもっている。障害児などの教育に、これらの刺激によって成長を促がすという目的をもって使う場合はよいであろうということである。

以上を要約すると、神賀氏は今日積木という形体だけが問題にされてその材質があまり考慮されていないので、もっと材質にも目を向けるべきであり、その材質が子どもに与える影響に意義をみい出してほしいと述べている。

〈神賀忠吾の積木〉——次に神賀氏の積木について述べてみる。積木の種類として、重箱つみき、たるつみき、車輪つみ木、自由つみきなどがある。

積木のセットの中には、正三角形を入れている。フレーベルの恩物は直角二等辺三角形であるが、一般に我々や幼児がとらえている三角形を考えると正三角形である。直角二等辺三角形はかたづけに合理的ではあるが、実質的に幼児が一番なじむ形として正三角形にしたという。また、球形は入れていない。球というのは幼児にとつてあまりに自由すぎるからであると

いう。つまり、幼児が自分で作動することができず、幼児の意志では、球を使いこなせないというわけである。

神賀氏の積木は、必ずしも積むということだけを目的としたのではなく、中央に穴があいている積木はただ積んだりできない幼児が指を入れて遊べるようにも作られている。積木を積む時と、並べる時では使用する指が違うので、子どもの発達によっても与える積木に違いがあるとして、その大きさなどにも配慮している。

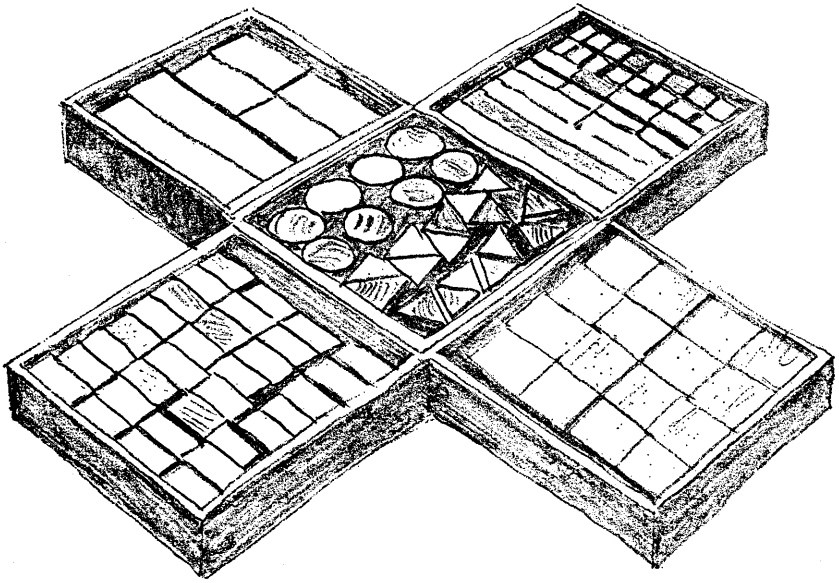
〈積木の数と大きさ〉——また、神賀氏は積木の条件として、数がたくさんあること、同じ形がたくさんあること、相似の形があることの三つをあげている。これらによって数学的概念を育てることができ、図形がどんなものかを幼い時に触れて感じるができる。数という概念も最初は一つとたくさんという区別から、徐々に細かくわかってくる。また、同じ形や相似のものがあることによって、等しいとか半分とかいう

概念も身についてくる。

手づくりの積木を専門的に創る場合、このように数学的な要素を積木づくりに取り入れ、単に適当に木を切つてつくればよいというものではないということとを指摘している。積木は正確につくられていなければ、幼児に正しい数学的概念を把握させることはできなく、積木の大きさに規律性がないと遊んでいても幼児はいらいらして落ちつかなくなってしまうからである。

手づくりの玩具は、作った人の暖かみが玩具を通して幼児に伝わるのでよいと評価されているが、積木のような玩具はさらに遊ぶことによって幼児にもたらす効果——この場合は数学的能力の発達を促がす——がなければならぬ。

現代は、とにかく「物」であればどんなものでもよいという考え方が主流をしめているが、かえって反動として手づくりのものが見直され、せめて子どもの玩具には手づくりのものを愛情こめてつくろうというこ



とがいわれている。神賀氏の玩具は、仕上げの最後の部分で玩具の表面や角にていねいに紙やすりをかけてつくられる。幼児が触れた時に何か感じとってほしいとの一念で、平面であるところも微妙な起伏を入れたり、細やかな配慮をしているとのことである。

このように、神賀氏の玩具、また積木はその材質から仕上げまで、それで遊ぶ子どもの個性や可能性を引き出すにはどのようにすればよいかということ、たえず考えながらつくられているものである。

神賀さんのつみきには、前述されたようにいくつかの種類があるが、ここでは、重箱つみきについて紹介してみることとする。

市販されているつみきと異なる点は、引用文中に述べられたことその他に、つみきを入れる箱が少しゆるやかにできているということである。箱の中にきちんとすべてのつみきが納まった時に、子どもの指が入るだけのわずかな空間が箱に残されている。この余白は、つみきを納

める時も、とり出す時も重要な空間になる。その上、つみきがすべて納まった時にも決して並べたつみきがくずれるということはない。

考えてみれば、この小さな余白がないために、幼児がはじめて箱から最初のひとつをとり出す時、ちよつとしたプラスチックンにかられる瞬間があったわけである。この余白は、最初のこのいらいらの気持を経験することをさせない。

つみきの材質について、つけ足すと、木には暖かいと感ずる木と冷たく感ずる木があるということも神賀さんが度々いわれることである。色、におい、感触、温度、重さなどそれぞれに異なる性質について、木を通して子どもたちの感性を呼びおこしたものである。

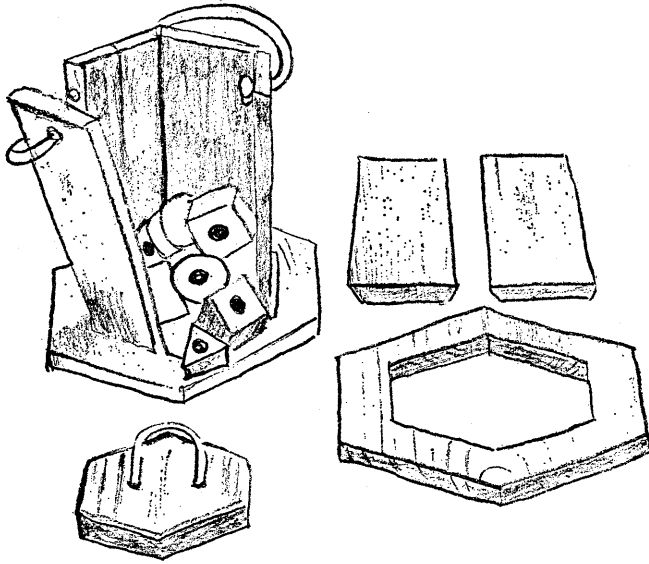
六、たるつみき

Eさんと神賀さんを訪れた日、そろそろ暇乞いをしようとする、神賀さんが手元に丁度あるといって、二つのたるつみきを持ってこられた。今日の記念に下さると

いうことでテーブルの上に二つ並べた。

神賀さんは、私にまず好きな方を選んで下さいといった。私は少々当惑した。つまり、どちらでもありがたく頂戴したいという常識的社会的通念が頭の中を占めていた。しかし、神賀さんは、それ以上の感性を要求してきた。二つをよく観ると、同じ呼び名の玩具であるが、手づくりの木の作品である為、細かい点で微妙に違っている。それならばということで、私も常識的な立場を一端すて去り、自分の感性にどちらが好ましくうつるか問うてみた。やがて、AとBのうち、Aの方がよりよい作品と思えた。が、次の瞬間には、自分用にBを選び、「では、こちらをいただきます」といった。神賀さんは、どうしてBの方を選んだのか（つまりAの方がよい出来上りと思っているらしく）と尋ねた。私は申し上げにくかったが、Aの方がいいと思ったが、Eさんにそれをお渡ししたかったからと述べてようやく神賀さんに納得してもらったことがある。

そのたるつみきとは、次のようなものである。



夕方遅く帰宅して、子どもたちはめづらしいおもちゃに大はしゃぎだった。小学校低学年の子どもは、つみきを全部分解したあと、再び元の形に納めるのに、夕食前の一時間をかけた。その時のとりくみ方は、声の記録をテープにとっておきたい程興味深かった。

周囲の私達は、なるべくかけ声や、手助けしないで、何気なくふるまっていた。彼女は最初は、「こんなもの」とか「ちえ」とか荒々しい言葉を多く発していた。が、決して、あきらめて夕食の食卓につこうとしないのである。時々、祖母が夕食をすすめても、これが出来るまで絶対に夕食を食べないなどいい出した。傍で幼い妹がみているが、一人でとり組んでいる。

やがて、もうじき形を成すことが本人の意識にも周囲の目にもみえてくると、出す声の調子は柔らかくなり、作品にぶつける言葉でなく、自分自身への励ましの表現と変ってきた。小一時間とり組んで、元の形に納めた時、周囲の家族からそれ程賞讃された訳でもないのに、本人は大満足で夕食も勢いたくさん食べた。

その後は、コツをつかんだのか、又たとえ当初うまく元の形に出来なくても、自分は絶対にやれるという自信が湧いたのか、形をこわすのをもったいながる妹を横目に、「お姉ちゃんが絶対に元どおりにしてあげる」というのである。

中の小さな数あるつみきは、ままごとにもよく使われた。六角形の枠は、窓になったり、ふたとった空洞は、その中を通して物をやりとりする通路にもなった忘れがたい作品である。

七、最後に

神賀さんの作品は、この他にも二十四種類程、銀座の松屋で紹介されている。

すぐに買い求められる作品は少なく、欲しい人が現われた時に、神賀さんがその人のことを思いやりながら製作するものがほとんどと思う。

ここで蛇足かも知れないが、作品に出会う時の私なりの心構えを述べさせてもらいたい。

まず、社会的通念などは一切忘れ、自分自身の感性をなるべく素直に呼びおこした上で作品に出会うことを薦める。

次に、一度に複数の作品と出会わないことであると思う。一つの作品のよさを十分に味わうには、それだけの時間とゆとりが必要である。神賀さんが、作品のパンフレットを嫌う気持のひとつもそこにあると考える。

私は平凡な自分の感性で、出会いは一度に一作品だとしてつくづく思った。なぜかといえば、それは、当然ある人の感性が、別の人の感性と出会う時、製作者のこの一品に費したエネルギーを考えれば、それに応え得る感性を、私たちは一作品以上に持ち合わせていないからである。

神賀さんが、自分の作品が商品的になるのを嫌うことを理解するならば、私たちもゆっくり、じっくりと自らの感性を投じて作品に出会うことではないだろうか。

|| 了 ||

(常磐女子短期大学)